

時代の要求に応えた研究会の発展を！

—北海道家畜管理研究会40周年にあたって—

大久保 正彦 (名誉会員)

創立40周年にあたって

北海道家畜管理研究会が創立40周年を迎えることを、ここ中国新疆ウイグル自治区で知らされ、研究会の運営に長く携ってきたものとして感慨深いものがある。1961年に制定された旧農業基本法のもとで畜産は選択的拡大部門と位置づけられ、急速に発展していった。規模拡大、機械化、高能力化の進むなかで、家畜管理をめぐる様々な問題が生じ、従来の狭い畜産分野の枠をこえた取組みが求められた。北海道家畜管理研究会は、こうした時代の要求に応えた、様々な分野、立場の人達による研究会として発足、活動し、北海道のみならず全国的にも多くの貢献をしてきたものと誇りに思っている。しかし21世紀をむかえた今日、畜産をめぐる状況は北海道、日本のみならず、世界的にも大きく変化してきた。今や環境と調和した生産、安全な食品の生産という課題を抜きに、畜産のあり方、家畜管理のあり方は語れないであろう。BSEや鳥インフルエンザの発生は、我々に新たな課題をつきつけており、40周年を迎えた北海道家畜管理研究会もこうした課題にどう応えていくか問われているといえよう。

中国の草地、畜産をめぐる若干の問題

筆者は2004年2月から、ここ新疆ウイグル自治区で、JICA個別専門家として草地の砂漠化防止・農畜牧業の改善に取り組んできており、この2年間、自分で見聞き、感じてきたことを紹介する。

周知のように中国はこの20年あまり急速な経済成長をとげ、いまや世界の「工場」とまでいわれるようになった。また有人宇宙船の打上げに象徴されるように、科学技術の進歩も著しいものがある。しかし同時に、経済発展の格差、貧富の格差

の拡大、環境・資源問題の深刻化などがかかえ、その対策に苦しんでいる。いま中国で最大の課題は「三農問題」といわれている。すなわち農業、農村、農民問題である。発展している面は多々ありながら、先進国の農業生産や中国内の工業生産の発展にくらべ、全体としては依然として遅れている農業生産、都市部に比べ公共インフラ整備が遅れている農村部、そして低収入で、貧しい生活を強いられている農民、こうした問題の解決抜きにして安定した豊かな社会の実現はあり得ないと中国の指導者たちは考えているが、筆者も強くそのことを感じる。しかし同時に、極めて困難な課題であるとも思う。

農業のなかでも畜産生産の発展は目覚ましい。やはり経済成長に伴い畜産食品の需要が増大し、農民の新たな収入源としての可能性が大きいからだ。1989年から2004年までの15年間で見ると、乳生産は5.4倍、肉生産は2.8倍、卵生産は3.8倍と大幅に増加している。肉では、豚肉の2.2倍に対し、牛肉6.3倍、家禽肉4.8倍、羊肉4.2倍と家畜種による違いが目立つ。こうした発展を主に担ってきたのは、企業などの大規模集約経営や各地に建設された畜産生産団地(養殖小区)での生産である。前者は、都市近郊などの養豚、養鶏、酪農などが主で、購入飼料依存型といえよう。政府は畜産を引続き発展させるべき分野と位置づけており、今後も発展の趨勢は変わらないであろう。

このように中国の畜産は、全体としては目覚ましい発展を遂げているが、しかし同時に多くの問題を抱えているのが実態である。

第一に全体として生産規模が小さく、技術レベルが低いことである。乳牛を例にあげると、2003年現在、全国で177万余りの農家・牧場が890万頭

の乳牛を飼養しているが、飼養頭数5頭以下が85%で、飼養頭数100頭以上はわずか0.2%にすぎない。個体乳量も日本並みの農家・牧場もあるが、多くは3000kg、4000kgレベルである。

第二に、技術のアンバランス、体系的無さが指摘できる。例えば中国では乳牛の能力改善のためカナダなどから高価な種畜を多く導入している。また受精胚移植の有用性が強調され、各地でその先進技術の成果について誇らしげに聞かされる。ところが一方で乳牛改良の基本である血統登録や能力検定はほとんどされていない。胚移植の前に人工授精の普及、活用が先だろうと思われるが、そういう認識もあまり聞かれない。

飼料についていえば、穀物消費型の豚、鶏より節糧型（穀物消費の少ない）の草食家畜の重要性が強調されている。それ自体は正しいのだが、草食家畜飼養の基本である良質粗飼料の重要性についての認識は高いとはいえない。人工草地の拡大、耕地内へのサイレージ用トウモロコシなどの栽培は増加しており、乾草、サイレージ調製技術の指導もされている。しかし、かつて北海道で酪農の発展過程において“良質粗飼料の重要性”が機会ある毎に強調され、技術指導されてきたような熱気は感じられない。規模拡大にともない機械化も進行している。1990年代には、何百頭も搾乳牛がいる国営牧場でもすべて手搾りであったが、最近ではミルクカー導入が増えている。酪農団地のなかに乳業会社がミルクパーラーを建設し、農家は搾乳時に牛をそこまで連れて行って搾乳をする方式や、自前でミルクカーを導入する牧場、農家も増えている。これも北海道でのミルクカー普及過程と同じだが、やはり衛生管理の問題が大きい。

もはや畜産技術に関して中国が知らない技術はないであろう。現地の実情を考慮し、それらの技術を体系的に整合性あるものとして普及できるかどうか、そこに問題があると筆者は感じている。

第三に疾病対策である。中国ではいま鳥インフ

ルエンザが猛威を振るっているし、今年夏には豚連鎖球菌による疾病で多数の死者がでている。口蹄疫もときどき発生している。WTOに加盟した中国が、畜産物輸出を拡大していくには、国内の疾病対策強化が不可欠だが、困難が大きい。

第四に、環境問題、食品の安全性問題である。これは日本でも同じだが、社会的条件を考慮すると中国の方が深刻であろう。糞尿問題、天然草原荒廃も深刻になってきている。また牛乳、肉も含め食品の安全性に関する事件も多発している。

いま中国では来年から始まる第十一期五年計画立案にむけて、節約型、循環型、生態調和型社会の建設が強調されているが、まさにこのことは畜産分野でも考慮しなければいけないであろう。

おわりに

中国の畜産に関して感じてきたことの多くは、実は北海道家畜管理研究会の活動のなかで学んできたことと共通するものがある。もちろん自然・社会条件が異なるため、機械的に北海道の経験を当てはめるわけにはいかないが、参考になることは多い。中国でよく「因地制宜」という言葉が使われる。「その地域の実情に適したやり方をする」という意味だが、畜産についても共通する原則を因地制宜に適用していくことが重要であろう。

最後に、この機会に本研究会の運営にたずさわるなかで、多くのご指導を頂いた故吉田富穂先生、池内義則先生、朝日田康司先生、小竹森訓央先生に改めて感謝の意を表するとともに、北海道家畜管理研究会の新たな発展を心から祈念する。